

(1) 多様な性の学習について

本授業は、多様な性を通して多様性について考えるものです。しかし、指導案等はあくまでも一例ですので、子どもたちの実態に応じて適宜変更してください。

また、授業をすることが難しい場合においても、子どもたちに多様な性について伝える方法はたくさんあります。本資料の「(4) 授業外でできる取り組み」をご覧ください。

なお、多様性理解とは、一朝一夕にできるものではなく、教室を、学校を、すべての子どもが安心安全に過ごせる居場所にするためには、授業はもちろんのこと、日々のクラス経営が非常に重要だと考えています。是非先生方に、学校生活の様々な場面で、多様な性について考え続ける機会を子どもたちに提供していただきたいと思います。本キットが、先生方の不断の努力の一助となれたら幸いです。

(2) 実施教科について

本キットでは一例として道徳の指導案を用意しましたが、道徳以外にも様々な教科で多様な性に関する授業を展開することが可能です。また、複数時間の授業、教科横断的な学習を計画することもできます。学校の実態にあわせて工夫してください。

＜各教科・総合的な学習の時間・特別活動で＞

- ・保健体育(保健分野)で取り上げる
- ・技術家庭(家庭分野)で取り上げる
- ・社会(公民的分野)で取り上げる
- ・総合的な学習の時間で取り上げる
- ・美術、家庭科等でレインボーフラッグ、レインボーグッズ等を制作する
- ・学級会等でセクシュアルマイノリティも過ごしやすい学校にするための取り組みを話し合い、実行する
- ・学習発表会等で展示、口頭発表、演劇等の普及啓発活動をする
- ・委員会、生徒会等で普及啓発活動をする
- ・外部講師による講演会、ワークショップ等を実施する

(3) 授業の導入について

本キットが使用される場面は、学校によって様々であることと思います。数回にわたる学習の一コマである場合もあれば、特別授業のような形もあるでしょう。

したがって、指導案では導入を限定せずに、学校の実態にあわせることも可能にしました。その際のヒントを以下に例示するので、学校の実態にあわせて工夫してください。

＜学校での出来事から＞

- ・性教育の前後
- ・宿泊行事の前
- ・健康診断の前
- ・プールの授業の前

＜時事問題・メディアから＞

- ・著名人のカミングアウト、発言
- ・地域での同性パートナーシップ制度の導入
- ・セクシュアルマイノリティが登場する映画、ドラマ、CM等
- ・新聞記事

＜記念日・イベントから＞

国際的な記念日には次のようなものがあります。

- 5月 国際反ホモフォビア・トランスフォビア・バイフォビアの日(17日)
- 6月 プライド月間
- 10月 カミングアウトデー(11日)、Spirit Day(第3木曜日)
- 11月 トランスジェンダー追悼の日(20日)
- 12月 世界エイズデー(1日)、人権週間(4日～10日)、人権デー(10日)

(4) 授業外でできる取り組み

＜日常生活で＞

- ・ホームルーム等で情報発信する
- ・セクシュアルマイノリティに対する揶揄を発見した際、その場で注意することで、相談しやすい先生になるとともに、多様性に対して肯定的な態度を発信する集団づくりをする
- ・誰でもトイレを設置する
- ・学校図書館にセクシュアルマイノリティに関する本を所蔵する
- ・保健室、相談室等にセクシュアルマイノリティに関する本を所蔵する

＜家庭や地域社会で＞

- ・公開授業を実施する
- ・学校だより、学年だより等で、セクシュアルマイノリティについて学習していることを周知する
- ・保健だより、図書館だより等で、セクシュアルマイノリティについて特集する
- ・PTAの人権部等で勉強会等を実施する

(5) 児童への対応について

- 「ホモ」「レズ」「オカマ」「オナベ」「オネエ」などの発言があった場合
 - それらが差別用語であることを指摘する
 - 傷つく人がいるから言わないよう指導する
- 「きもい」「生理的に無理」「生物学的におかしい」などの発言があった場合
 - 「なんでそう思うの？」など理由を聞く
 - 「私はおかしいと思わないよ」など先生の意見を伝える
 - 「おもしろいことではないよ」など他の人権課題と同様の対応をする



アライ先生の対応例

「先生ってゲイなの？」という質問をされた場合、「私がどういう性のあり方でも、その質問には答えない」と返します。先生という立場にある自分がその質問に答えることにより、子どもたちに「人にセクシュアリティを聞かれたら答えるのが普通」という暗黙のメッセージを発してしまうからです。セクシュアリティについて聞くことをタブーにしたいわけではなく、私的な人間関係において信頼関係があればそうした質問をしてもよいが、パブリックな空間でプライベートな質問をしたりそれに答えたりすることは適切ではないことを伝えます。

(6) 周囲からの質問への対応について

他の先生や保護者など、周囲の方々から質問があった際の回答の一例をご紹介します。

Q：多様な性について、小学校で伝える意義はなんですか？

A：セクシュアリティは、自分を構成する要素の一つであり、アイデンティティの話です。

トランスジェンダーの人が性別違和感を自覚し始めた時期は、小学校入学前までが56.6%、小学校低学年が13.5%、小学校高学年が9.9%と、実に80%が小学校卒業までに自覚しています^(※1)。また、自殺念慮をもったことがあるトランスジェンダーの人は58.6%で、そのうち小学生の時期に自殺念慮が強かったという人が13.9%います^(※1)。

さらに、小学生から高校生の間に「セクシュアルマイノリティをネタとした冗談やからかいを見聞きした経験」のあるLGBTは84%、自身が「いじめや暴力を受けた経験」があるLGBTは68%にのぼります^(※2)。いじめや暴力を受けたことがあるLGBTには、小学校低学年から被害に遭っている人も多く、72%が複数学年にわたりいじめを受けています^(※2)。

多様な性について学ぶことは、セクシュアルマイノリティの児童にとって自己理解を深め、自己の性のあり方によって自己嫌悪したり自尊心が低下したりすることを防止すると考えられます。また、セクシュアルマイノリティの児童に限らず、多様な性について学ぶことで、一人ひとりがもつ個性に気づき、自己と他者の「ちがひ」について認識し、互いを尊重する寛容の態度を育むことができると考えられます。さらに、セクシュアルマイノリティに対する社会の偏見や差別をなくすためにも、多様な性についての教育が果たす役割は大きいと考えられます。

Q：多様な性について教えることで、セクシュアルマイノリティへの揶揄やいじめが増えてしまうのではないのでしょうか？

A：昨今、多様な性についてメディアに取り上げられることも珍しくなくなりました。一方で先述のように、「LGBTをネタとした冗談やからかいを見聞きした経験」のあるLGBTが約8割、「いじめや暴力を受けた経験」のあるLGBTが約7割います。そうしたことから、すでに子どもたちの周囲には、多様な性に関する情報が、時に間違った、偏った形で、溢れていると言えます。そして、それがいじめにつながる可能性があります。こうした現状を鑑みると、誤った情報で周囲を傷つけないためにも、正しい情報を伝えることは重要だと考えられます。

Q：セクシュアルマイノリティでない児童にも、多様な性について教える意義はありますか？

A：多様な性について学ぶ意義は、セクシュアルマイノリティの子どもだけのためではなく、全ての子どもにあると考えられます。理由は二つあります。

一つ目に、誰もがセクシュアリティ(性のあり方)をもっており、性の多様性について知ることが様々な多様性について考えるきっかけになるからです。

二つ目に、学齢期に友人からカミングアウトを受ける可能性はどの子どもにもあるからです。小学生から高校生の間にセクシュアリティを「周囲のだれかに話した」と回答したLGBTのうち、約6～7割は同級生に話しています^(※2)。カミングアウトを受けた時に意図せず相手を傷つけないためにも、セクシュアルマイノリティである本人だけでなく、周囲が多様な性について学ぶことは重要だと言えます。

Q：継続的に多様な性について学びたいのですが、何かいい資料はありますか？

A：認定特定非営利活動法人ReBitでは、メールマガジンやLINE公式アカウントで情報を発信しています。どなたでも無料で登録いただけます。また、認定特定非営利活動法人ReBitが運営する、先生のためのLGBTQに関するオンライン情報センター「Ally Teacher's School」では、書籍等を検索したり、実践事例を読んだりできます。

メールマガジン



LINE



ATS



(※1)中塚幹也(2017)『封じ込められた子ども、その心を聴く：性同一性障害の生徒に向き合う』ふくろう出版

(※2)いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン(2014)「LGBTの学校生活に関する実態調査(2013)結果報告書」